

日本健康心理学会メールマガジン No.13



2013年8月21日 第13号

Contents

- 1) 学会からのお知らせ
- 2) 速報！2013年度各賞の決定
- 3) 健康心理学コラムvol.9 関西学院大学 大竹 恵子先生

1) 学会からのお知らせ

<http://jahp.wdc-jp.com/>

■事業年度の変更について

本学会は、法人化された時が7月であり、そのために長らく事業年度が7月開始、6月終了となっております。しかし、官公庁、大学や他学会などの事業期間との整合性が取れないために、一般の社員総会におきまして定款の改正が行われました。2014年からは、4月開始、3月終了と事業年度が変更になります。変則的に2013年度は3カ月短く2014年3月までとなりますのでご承知おきください。なお、事業期間は短縮されますが、事業内容は変わりません。

■第26回大会

大会プログラムを掲載しました。

<http://jahp.wdc-jp.com/conf/26th/naiyou.html>

■「国民の身体活動増進を考える」研究部会からのお知らせ

来る日本健康心理学会第26回大会で研究部会のシンポジウムを開催します。若手研究者と健康企業のタニタ開発部の塩川さんに登壇いただきます。ご期待下さい！

●会員企画シンポジウム ▼9月7日(土) 13:00~15:00 会場:A401▼

「身体活動・運動の促進に向けた社会環境整備に対する健康心理学の役割」

企画者：岡浩一朗・荒井弘和・安永明智

話題提供者：石井香織・原田和弘・塩川隆

その他、研究推進委員会のシンポジウムで本研究部会の方向性をお話しします。

身体活動増進の発表を集めたテーマティックポスターセッションも開催されます。

■研究部会のフェイスブックページがあります。

「国民の身体活動増進を考える」研究部会、で検索いただければ幸いです。

2) 速報！2013年度各賞の決定

2013年8月16日に開催された常任理事会において、2013年度の本明記念賞、実践活動奨励賞、ヤングヘルスサイコロジスト賞が決定しました。メールマガジンでは、速報という形で結果をいち早く皆様にお届けします。

本明記念賞は、9月7日の第26回大会社員総会の前に、実践活動奨励賞とヤングヘルスサイコロジスト賞は、大会の懇親会時に表彰が行われます。

■受賞者および受賞内容一覧（敬称略、五十音順、本明記念賞は著者順）

●本明記念賞

飯尾美沙（早稲田大学人間科学研究科*）

前場康介（科学技術振興機構社会技術研究開発センター**）

島崎崇史（早稲田大学人間科学研究科）

大矢幸弘（国立成育医療研究センター生体防御系内科部）

竹中晃二（早稲田大学人間科学学術院）

*現 関東学院大学看護学部

**現（医社）こころからの元氣プラザ産業保健部

「気管支喘息患児の長期管理に対する保護者用セルフ・エフィカシ一尺度の開発」

●実践活動奨励賞

島崎崇史（早稲田大学大学院）

「ヘルス・コミュニケーションを用いた市民のスマールチェンジ健康行動介入」

杉田秀次郎（文化学園大学）

「地域の小中学校における薬物乱用防止教室の実践」

畠中香織（岡山大学大学院）・田中共子（岡山大学）

「在日外国人ケア労働者と日本人スタッフにおける協働文化の創出と異文化間ケアの実践」

●ヤングヘルスサイコロジスト賞

合澤典子（お茶の水大学大学院人間文化創成科学研究科）

尼崎光洋（愛知大学地域政策学部）

伊崎翼（広島大学大学院総合科学研究科）

遠藤伸太郎（立教大学大学院コミュニティ福祉学研究科）

川人潤子（福山大学人間文化学部）

金ウソビ（筑波大学大学院人間総合科学研究科）

小沼佳代（早稲田大学大学院人間科学研究科）

島崎崇史（早稲田大学大学院人間科学研究科）

田中芳幸（京都橋大学健康科学部）

八田直紀（神奈川大学健康科学スポーツセンター）

3) 健康心理学コラムvol.9「幸せとおいしさの健康心理学」（関西学院大学文学部総合心理科学科 大竹 恵子先生）

幸せって何だろう？

この問いは、心理学においても、とても大きな課題のひとつですが、健康心理学からアプローチできる興味深いテーマとして「食」があると思います。

2012年のPsychology Todayに「a palate for pleasure」という記事があるように、おいしいと感じる幸せな経験は、多くの人が実感していることだと思います。私は現在、このようなおいしいと感じる現象やそのメカニズム、実際の食行動を、幸せとの関係から探求しています。

おいしさには、さまざまな側面があり、ポジティブ感情の定義や幸せとの関係なども含めて検討すべき課題はたくさんありますが、ポジティブな感情状態での摂食行動に関する質問紙の開発や実験、食に関する自伝的記憶の研究、感性満腹感に関する実験等を通して、ポジティブ感情や個人の幸福感と食への認知や行動との関連について検討しています。

例えば、幸福感が高いとそうではない人を比較してみると、食べることが好きかどうかという点については両者に違いはみられないのですが、食刺激に対する反応や実際の食行動、食べることで幸せを感じる程度には差があることがわかってきました。

このことは、一見、単純で当たり前のように感じるかもしれませんが、しかし、そこには幸せと健康行動のメカニズムがあり、おいしいと感じられることを幸せのひとつの側面として見てみると面白い発見があります。

健康心理学だからこそできる予防対策として、幸せとおいしさを探求し、社会に貢献できる研究をめざしたいと考えています。